### 九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

### 咸宜園と洋学

杉本, 勲

https://doi.org/10.15017/2235990

出版情報:史淵. 105/106, pp.205-237, 1971-08-20. 九州大学文学部

バージョン: 権利関係:

# 咸宜園と洋学

たしは他の若干の研究分担者とともに学術思想史班を編成し、そのB「咸宜園門下生の洋学」部門を担当して、その研 は達していない。したがってこの報告は、わたくし一人の責任において行なうものであることをあらかじめ明記してお 究調査にあたった。本稿はその研究報告の一端であるが、 昭和四三年度より文部省科学研究費の交付をうけて開始した「近世日田とその周辺地域の総合的研究」において、わ 種々の事情からいまだ共同研究の成果をまとめあげる時点に 杉 本 動

## 一、は し が き

く。

簿』をたよりに門下生の研究歴の追跡調査を行なうべく、フィールド・ワークを企図したことがあったが、四千人のすべ 坂・江戸・長崎等の地に遊学したものが、全門下生四千余人のうち相当数存在するとの想定のもとに、まず咸宜園『入門 きことを知った。 てにわたって一々調査することは、いうべくしてきわめて至難であり、 史料探訪の面からもいたずらに労多くして功少な 林外等のもとで、 咸宜園における課程を一応すませたのち、 さらに医学・兵学その他の洋学部門に 進路 をもとめて、 大 ではじめわたくしたちが咸宜園門下生の洋学について調査を企図したとき、幕末有為の青年で、広瀬淡窓・旭荘・青邨・ ことは、充分に想像できるところである。それは時勢が急速に漢学よりは洋学を重要視するにいたったからである。そこ 咸宜園門下生の うちで 進んで洋学を身につけたものが 幕末維新に近づくにしたがって、 恐らく 激増したにちがいない

咸

咸

すぎず、その他に相良善次・矢田淳・原田種臣・藤野玄洋等が蘭医として知られているぐらいである。 な洋学者をもとめるとすれば、高野長英・岡研介・林洞海・武谷祐之・上野彦馬・大村益次郎・青木研蔵・松下元芳らに 仏・独などいわゆる幕末洋学者ということになると、その数はきわめて限定されてくる。 咸宜園門下生のうちでそのよう しかし単に洋学 を身につけたというだけではなく、 すくなくとも 飜訳書や関係著述をもつ知名の蘭学者 もしくは英・

な鍵を提供することは、まちがいないと思われる。 している。それらの書籍とくに写本類は熟読された形跡が顕著であるから、これらが咸宜園と洋学との関係を物語る有力 の数の洋学関係もしくは対欧米関係写本類が現存しているし、咸宜園図書中にも漢籍にまじって洋学関係刊本が若干残存 志のあるものにはむしろ大いに奨励したと考えられるからである。そのような事情によるのであろう。広瀬家にはかなり してはきわめて自由濶達で、儒学=漢学を主柱としながら、時勢を達観して洋学にたいしても非常に寛大な態度をとり、 朴・緒方洪庵といった著名洋学者との交渉を吟味することも大切である。 実は淡窓以来、同塾の教育方針自体が、当時と ところで 咸宜園と洋学との関係を考察する 場合、 淡窓・旭荘・青邨・林外等園主の 洋学観ないしは 坪井信道 伊東玄

渉を調べ、闫最後に広瀬家所蔵の関係書類(主として写本)を検討し、門人らの編著にもスポットをあててみたいと思う。 らの洋学観をうかがい、また著名洋学者らとの交友関係を吟味する。 ⇔つぎに門人中の前記洋学者の動向と淡窓らとの交 以上申しのべたような見地に立って、本稿では一まず淡窓を中心とする咸宜園の教育方針をさぐり、それを通じて淡窓

# 二、広瀬淡窓の洋学観

ないが、『迂言』にのせた「学校ノ制」によると、まず学を「文武ノ両学」に大別したうえ、文学を細分して、 の教育の根本の理念が「約言」の敬天説であることについては先学の考証もいくつか出ているので、ここでは繰りかえさ 咸宜園における広瀬淡窓の教育方針については、 かれ自身「学則」・「規約」・「告論」・「申聞書」等に明記しており、そ

文学ニテハ。経学。歴史学。諸子学、文章学。兵学。医学。天文学。和学。 職原学。 蘭学。 **書学。 数学。** 

数に測量を加えれば、当時まだ漢学系統の諸実学が残存していたものの、それらがすでに蘭学の主要科目になり 当代の「実学」の大部分を網羅しているのである。蘭学のほかに兵・医・天文・数の諸学を羅列しているが、医 一切文字言語ヲ以テスル事ノ。国用ニ供スヘキコトハ。皆教官ヲ置キテ。科目ヲ分チテ研究スヘシ

つつあったことは、すでによく知られていたから、淡窓もその含みをもって教科目に掲げたものと思われる。 そこで淡窓のそうした学問観を『約言或問』第二十「学ニ科目ヲ分ツノ弁」についてみると

事少キハ一人ニテニ科ヲ兼ヌルモアルヘシ。総テ当時ノ学ハ科目ヲ分ツコトナキニヨリテ。人ノ知リタルコトヲ我知 穿鑿スヘシ。 ス也。 家ハ文章ヲ能クセストモ。恥ツルニ及ハス。歴史家ハ天文ヲ知ラストモ苦シカラス。 唯己カ科内ニ暗キコトアレハ恥 百人アリテモ。一人ト同シコトナリ。今科目ヲ分ツニ於テハ。己カ科ニ非ルコトハ手サヽヌ様ニスヘシ。 ラサレハ恥ニナル故ニ。競テ同シ路ニ走ル。故ニ我カ知ラヌコトハ人モ知ラス。人ノシリタルコトハ我モ知ル。 術家・歴史家・文章家・天文家・和学家・軍学家・蛮学家ナト言フヤウニ定メテ。事多キ科ハ。 一科ニ数人ヲ用 専門ハ之ヲ他事ニ推広ムルナリ。喩ヘハ当時諸侯ノ内ニモ。大国ノ儒官ノ二十人モアルヘシ。其内ニテ科ヲ分チ。 古へ専門ノ学ト言フコトアリ。 アラヌ素読講釈等 モ学校ノ内ニ具フル様ニナル也。 ハ。学問国用ニ立ツ也。当時ノ学問国用ニ立チカヌルコト。兼テ科目ノ分チナキ故ニ。儒者ニ非ル者マテモ。 和学蛮学軍学ナトハ。今へ儒者ノ与ラヌ事ニ成リタレトモ。右ノ如クスル時ハ。儒家科目ノ一端ニ備ヘテ。 コレ天職ヲ重スル所ニシテ。 或ハ国初以来。 三隊 ヲ費シ。 政務ノ旧規。或ハ人君之作事。或ハ日本ノ地理風土ナト。皆研究スヘシ。 コレ極テ良法ナリ。 数年ヲ歴テモ格別成就スルコトモナシ。Cヰ名々己カ好ムコト而巳ヲ専一ニスレハ。 其外ニモ国用ニ立ツヘキコトノ。文字言語ヲ以テスル程ノコトハ。 即敬天ノ義也。 但シ古ノ専門ハ。六経ノ一部ツ、分チテ研究スルナリ。 如此スレハ学者ノ身分閑暇ニナル也。 於」之万事ニ広ク手ヲワタ 残ラス科ヲ立 喩へハ経術 心ニモ

咸

宜

園

لح

洋

学

(杉本)

其筋ニ達人出来テ。大ニ国家ノ光トナルヘキ也。

学も天文学・軍学などをふくめて、堂々と市民権を獲得しており、専門家→達人の出現が期待されているのである。 とあり、儒者にありがちな偏狭な学問観から解放された自由濶達な淡窓の学風を端的にしめしている。そこでは蛮学=洋

評にたいして、シーボルトと蘭学を弁護したもので、「是全ク児女俗人ノ見ナリ。 総テ彼国ノ学問ト言フハ。 格物窮理ヲ 耳にしたときの論評をあげることができる。それは断罪によって「専ラ彼国ョリ我邦ヲ襲フ謀アル様ニ申シ沙汰」した風 も'♡ 「蘭人一件も一切片付キ至而事状軽ク聞之大慶存卧。 蘭学衰微之端ニハ相成申間敷ヤト大ニ致懸念卧処安心之至卧」 学の本質と西洋人の学問にたいする厳しい態度を的確に指摘しており、暗に幕府の蘭学(者)弾圧を非難しているのであ 主トシテ、天地間一物不」知ヲ以テ憾トス。故ニ我邦ノ事ヲ捜索スルモノニシテ、 姦謀邪計アルニハ非ス」と断じて、 蘭 と記し、弾圧が蘭学衰退の原因になりはしまいかと憂えていることをつけ加えよう。 る。 シーボルト事件の断獄については、 淡窓の愛弟子岡研介にあてた年月未詳(多分文政一二年ごろ)正月十八日の書簡に なおかれの洋学観をうかがう一資料として『懐旧楼筆記(巻二七)の文政一一年(一八二八)シーボルト事件の判決を

十六、文化一二年の条に、 つぎに淡窓と著名洋学者との関係の吟味にうつろう。その第一は坪井信道であるが、かれについては『懐旧楼筆記』巻

才気アリ。志願アルモノナリ。此ノ年ノ冬。当疆ヲ辞シ去リシカ。其後モ両三度来遊セリ。 此ノ人後年東都ニアリ。 尾州ノ医生ニ坪井環ト言フ者アリ。三四年来。三松斉寿カ家ニ寄寓シテ。医ヲ学ヒ。常ニ余カ家ニ来往セリ。

称ヲ改メテ信道ト言フ。蘭学ヲ唱へ。当世ノ一名家トナレリ。余カ門人医ヲ学フ者、往々其門ニ入レリ。

三右衛門(その弟)の三名にあてた弘化二年六月十二日付の長文の書信がのせてあるが、これは志を立てて江戸に出た旭 には親交関係があったことを物語っている。さらに前記『書翰集』には坪井信道•伊東玄朴より淡窓•久兵衛(淡窓の弟)• と記し、信道が江戸に出て有名になり、伊東玄朴・戸塚静海と当代蘭医の三大家と称せられるずっとまえから、両者の間

荘が、塾生もおいおい増し、名声が次第にたかまりつつあるのにもかかわらず、不幸続きのため淋しく同地を引揚げよう 間に無二の交際があったことは、旭荘の日記(『日間瑣事備忘録』)にさかんに出てくる記事によって察知できるが、ここ 中絶させるのは何としても惜しい、帰国の儀は一両年見合わせては如何と懇切を尽した書状である。実際旭荘と信道との 信道と玄朴が、何とか江戸に引きとめようと策して両三年の内には大発展をされるに違いない、それを

では省略する。

の伊東玄朴と旭荘との間柄も前記の書信で想像がつくが、『日間瑣事備忘録』天保十四年八月十九日の条には旭荘が玄朴 の屋敷を訪れて酒食の饗応をうけたことが記されてある。 人岡研介を信道の門弟として蘭医方を学ばせ、一方信道はその長子信友を旭荘の門にいれているのである。 とにかく広瀬家と坪井家とは、以上の如く淡窓・久兵衛・旭荘と信道との間に親交があり、そのため淡窓は寵愛する門 肥前神崎出身

者に面接し、万里には淡窓の門生をその門弟として託している。つぎに長崎の高島四郎太夫(秋帆)との関係も密接で、 事件について「九老之有秋帆。 ひととなりと淡窓にたいする立場を位置づけている。そして上欄に秋帆が天保十三年(一八四二)讒訴により投獄された るが、『懐旧楼筆記』のそのときの記事に「余、四郎太夫ト書信往復スルコト二十年。 交義頗ル熟セリ。 天保一二年(一八四一)淡窓が下関方面に旅したさい、たまたま江戸より長崎への帰路、同地に館した秋帆を、 いて、いずれもシーボルトに教えをうけた蘭医であるが、淡窓が天保一三年(一八四二)博多に遊んだとき、この両洋学 ハ極メテ若クシテ礼アル人ナリ、其言ニ曰ハク。小子先生ニ業ヲ承ケストモ、実ニ師ヲ以テ事フルノ志ナリト」と、その ハ此度ヲ以テ始メトス」⑴とあり、つづいて秋帆が砲術の事をもって幕府より褒賞をうけたことを叙したあと、「四郎太夫 ところで淡窓と洋学者との友交関係をもうすこし吟味すると、近くでは筑前に門人武谷祐之の父武谷元立と百武万里が 前後一人。惜哉。大福不」及」旋」踵而陥禍」と同情をよせているのである。 然レトモ。 訪れてい

つぎに淡窓は京都の蘭学の大家で小石元俊の 子元瑞(拙翁)とも親交があった。『懐旧楼筆記』 天保一六年九月六日の

Ή

園

と洋

学

↘惜°」と記しているところから察せられよう° 元瑞を文人として評価していたことは、やはり七日の上欄に「拙翁業雖||方技|。名列||文苑|。此行帰」家。無」幾而歿。可 とが同門の親友であった関係から格別の好誼を結び、淡窓は門人数人を元瑞のもとに送っているのである。 しかし淡窓は 且耶馬渓ヲ観ンカ為ナリ。帰郷ノ後モ。数度書ヲ応復セリ」と記している。 このように元瑞の父元俊と淡窓の師亀井南冥 吾カ輩。是也。此度ハ久留米侯ノ招ニ因ツテ来リ。今洛ニ帰ルナリ。其言ニ曰ハク、日田ニ過キルコト。 唱へテ。一世ノ名家タリ。拙翁初ハ元瑞ト称ス。能ク父ノ業ヲ継ケリ。予カ門人。往々其門ニ入ル。茂・春安・勲平・肩 条をみると、「京都ノ小石拙翁来見タリ。 門人小森宗治・龍野成二従ヒ来レリ。 予カ門人内山肩吾。 当時小石カ門ニ学へ 「予自ラ小石カ旅館ニ至ツテ謝ス。拙翁カ父元俊。独嘯庵ノ門人ニシテ。南溟先生ノ親友ナリ。京摂ニテ。 此度導ヲ為シテ来レリ。 宴ヲ設ケテ之ヲ饗ス」とあり、二人はたがいに漢詩を交換している。 さらに七日の条には 淡窓翁ニ見エ。 始メテ蘭学ヲ

な学風から、むしろ時勢に照して洋学の窮理性の優秀さを認めてこれを尊重し、洋学の興隆を期待したためであろう。 は、一部の固陋な漢学者とはちがって、前記のごとく、洋学を自己の信奉する漢学と対立させることなく、その自由濶達 と淡窓との親交も知られている。いずれにしても淡窓が、このように高名な洋学者とも隔意なく、親密な関係をもったの 等何人かの該当洋学者があると思われるし、日出藩の家老でかつ漢詩人でありながら、洋学にも造詣の深かった帆足万里 の小石元瑞など各地の知名洋学者との交友関係を検討した。このほかにもなお精査すれば、たとえば緒方洪庵・鈴木春山 かしまた逆に淡窓はすぐれた洋学者らと接触することによって、海外事情や洋学への認識を深めえたこともみのがしえな 以上、広瀬淡窓と坪井信道・伊東玄朴ら当代一流の東都洋学者や、筑前の武谷元立・百武万里、長崎の高島秋帆、

高名の洋学者のもとにおくって医学・兵学等当代緊要な実学を専攻させたが、このようなやり方によって学問交流のいく こうした親交関係をふまえて、淡窓は咸宜園で漢学の一応の課程を了えたうえで、さらに洋学学習を志願する門人を、

れにはこうしたルートの形成もあずかって力があったと思う。いずれにしても淡窓のこの教育方針は、漢学から洋学への つかのルートを形成することができた。咸宜園出身の多くの有為の士が、幕末から明治にかけて各方面で活躍したが、そ

転換期における、まことに興味ある事例を提供するものといえよう。

- 1 2 のせてある。 学則は『淡窓全集』に収録されていないが、中島市三郎『教聖広瀬淡窓』に全文を掲載、「規約」、「告論」は『全集』巻中に 小西重直『広瀬淡窓』(『日本教育先哲叢書』巻一〇)・角光嘯堂『広瀬淡窓の思想と教育』・中島市三郎前掲書等参照。
- 3 「迂言」(『淡窓全集』巻中所収)三九頁。
- $\frac{2}{4}$ 「約言或問」(同右所収)二三・二四頁。
- 5 「懐旧楼筆記」(同右巻上所収)三五〇・五一頁。
- 6 『広瀬淡窓旭荘書簡集』四三頁。
- 7 「懐旧楼筆記」(『淡窓全集』巻上所収)三〇一頁。
- 8 |蘭学界の先覚者坪井信道」(『日本及日本人』昭和四五年五月薫風号、所載)を参照。 坪井信道は美濃国池田郡脛長村の出生であるから、「尾州ノ医生」は何かの誤りであろう。 なお信道の伝記 については中野操
- 9 前掲『―書翰集』三五~三八頁参照。
- 11 10 『懐旧楼筆記』(『淡窓全集』巻上所収)五九七、五九八頁参照。 同右、五七九頁。
- 12 同右、七四七・七四八頁。
- 13 『儒林評』(『淡窓全集』巻中所収)一三頁に、長門の永富独嘯庵に従って医を学んだとある。
- 元瑞は嘉永二年(一八四九)二月十日死歿。 『懐旧楼筆記』(『淡窓全集』巻上所収)七四八頁。

## 三、咸宜園門下の洋学者

くに種痘の普及につとめた。 学所の教授になった人、青木研蔵はシーボルトの教えをうけ、兄青木周弼と力をあわせて長州藩の洋学興隆に貢献し、と 林外らが、中島子玉・大隈言道らの上にならんでいる。第四段になって、松田道之・清浦圭吾・横田国臣ら明治以後に活 郎・岡研介・武谷祐之・上野彦馬等の洋学者が長三州・谷口藍水等の漢学者とともに名をつらね、第二段に旭荘・青邨・ 躍する逸才が位置しているのである。この番付からみても咸宜園では洋学者が非常に高く評価されていたことがわかる。 とどめた人物である。これらのうち高野長英・大村益次郎はあまりにも有名であり、林洞海ものちに幕府の侍医や西洋医 なおこのほかにも林洞海・松下元芳・矢田淳・青木研蔵らも番付にこそのっていないが、いずれも洋学史上にその名を 咸宜園か広瀬家先賢文庫を訪 れると、 まず門人番付表に目がつく。 番付の第一段には、 高野長英をトップに 大村益次

る。 る者は、其れ高野長英か」と歎称したと伝えられる。大村・林・青木等については、淡窓との関係は未詳であるが、今後 未整理の広瀬家所蔵の書簡類(約一万点)を精査したあかつきには、種々の新事実が発掘されるのではないかと期待され ないが、文政一一年(一八二八)のシーボルト事件当時、しばらく咸宜園に身をよせただけで、他の門人とは別格であっ ところ岡研介・松下元芳・矢田淳・武谷祐之・上野彦馬の五人のようである。 もっとも高野長英は淡窓の高弟にはちがい しかしながら『懐旧楼筆記』その他の著述や書簡にその事蹟がのり、淡窓が格別目をかけたと考えられるのは、いまの 右のような事情から、ここではとりあえず、岡・松下・矢田・武谷・上野(入門年代順)と淡窓との師弟関係をすこ 淡窓は長英の人物の群をぬいて傑出していることは充分看破し、「吾門下数千人中、一飯の間も国を憂ふるを忘れざ

### ) 岡研介

しくうかがってみる。

塾したが、その前後に福岡の亀井昭陽のもとにも師事した。淡窓は研介の才学を称揚し、中島子玉・僧圭とあわせて咸宜 事件に入獄したるが原因にて、 長崎を去りて豊後の日田に到り、広瀬淡窓の門に学ぶ。故に其の難を免る」と記し、同書天保一〇年尚には「シーボルト 事件からどんな影響をうけたであろうか?、『日本洋学編年史』天保元年闰には「シーボルトの獄起りし時、 ろ貝原益軒『大和事始』を蘭語で抄訳し、シーボルトに提出している。翌一一年シーボルト事件がおこるが、 英とともに最初の塾頭とした。一〇年には萩の豪商熊谷五右衛門の依嘱により長英と『蘭説養生録』を共訳、 二三)シーボルトが来日し、翌年鳴滝塾が設けられると研介は早速長崎に遊学したが、シーボルトは研介の才能を愛し、長 のとき咸宜園に入門したごとくであるが、これは誤りである。また後文によれば事件に連坐して所罰をうけたことになる 園三才子の名をあたえた。その間淡窓は江戸の坪井信道のもとへ研介を入門させ、蘭医方を学ばせている。 文政六年(一八 寛政一一年(一七九九)周防国熊毛郡平生村に生まる。文政二年(一八一九)四月一三日三松斉寿の紹介で咸宜園に入 晩年、 幻覚的精神病に罹りて(年四一にして一杉本註)遂に斃る」とあり、 前文によればこ またそのこ 研介はこの 研介は己に

物市 洋ヨリ来リシ艾儒略カ所」著ニシテ。 アリテ。 余 書生ヲ執へ、詰問アリシニ。研介ヨリ借用セシ由ヲ申ス。研介モ亦人ニ借リタルナリ。研介已ニ崎ニ到リシニ。 V タルハ。禁書ノコトニヨレリ。此比長崎ニ他邦ヨリ来学ノ書生アリ。三山論学記ト言フ書ヲ読居タリ。 モ従ツテ。蘭学ヲ研究シタリ。コノコロハ。長崎ヲ去ツテ。赤馬関ニ客タリシカ、長崎大尹ヨリ急ニ召サルトコト 、カ門人岡研介。長崎ニ在ルコト数年。 吉雄忠次郎カ兄権之助カ弟子トナリ。 又親シク失勃児(シーボルト―杉本註) ニテ買ヒタリ゜ 彼地ニ赴ケリ。世上ニテハ。皆蘭医ノ事ニ坐セラレタル由。専ラ沙汰セリ。是伝聞ノ誤リナリ。 ヘテ日ハク。 未夕見ルニ暇アラスト答フベシト。研介大尹ノ前ニ出テ。右ノ如ク答へテ事スミ。 必ス書ノ主ヲ明スコトナカレ。 天教ノ事ヲ申セシモノナリ。 聖堂ノ教授向井某其事ヲ官府ニ訟ヘタリ。 左スレハ。連累ノ者多クナリ。其禍ハカルヘカラス。 書ハ焚棄ニナ 是ハ明末西 研介カ召サ 因ツァ 唯古 彼地

が、これについては「懐旧楼筆記』文政一二年二月のシーボルト事件について叙した項に

咸

宜

遠

と洋

学

(杉本)

咸

リタリ。実へ忠次郎高橋氏ヨリ私ニ借用セシ由ナリ。高橋へ秘書監ヲ兼ネタリ。故ニ秘府ノ書ヲ取出セシトソ。

後半、研介長崎滞留中)の五月廿九日付書簡に、薬品恵投の謝礼につづいて、「三山論学記久々留置不堪感荷候。騰写相済候 学者にもその例はみられるけれども、充分特筆に値すると思う。 して注意をおこたらず、禁制をおかしてまでも『三論山学記』や『己克篇』に目をとおしている学的熱意は、 当代の他の (Giuglio Aleni)の教義書『三山論学記』には淡窓もいたく興味をしめした。それは研介にあてた年次未詳(おそらく文政 此節市右衛門へ託 シーボルト事件に連坐したとする伝聞の誤りを訂正しているのである。ところでこの禁書目にふくまれている艾儒略 重畳感佩仕候」と記していることから察せられる。このように淡窓が西洋思想文化の一源流たるキリスト教にたい 御返呈申候 御入手可被下候 己克篇辱落手仕候 是ハ今暫拝借奉願候 以御蔭珍異之品及寓目

立するが、そのとき淡窓は送別の一文を草して研介の行を壮にした。少々長いがその大体を抜書きする。 さてしばらく淡窓のもとで薫陶をうけた岡研介はおそらく文政一二年の某日、大志をいだいて江戸にむかって日田を出

送,,岡子究,宮

然曰。未成之業。既附11諸炎火1矣。於1是乎果知11子究之為11豪傑1矣。 表 | 。則墨之汭矣。握 」 手論 」 心。以及 ||往日 | 耶。及 ||其行事 | 。輙蹙然日。少年客気。久而自悔耳。及 ||其所 ||著述 | 。 輙幡 年所」詣未」可」量也。○中抑此可ႊ為||子究|言4。 難ႊ為||衆人||言4也。子究往哉。想||十年之後|。我再見||子究|。非||洛之 予。予曰。ႍ〇中今子究東帰。有μ講∥業於大都会」之志₄。拠∥天下之図書」。交∥海内之英俊」。其益広哉。且其歯未也。 中 胆。如||江河沛然莫||之能禦|。求||諸当世人|。未」見||其比|也。子究山陽之人。西遊||我党|有」年。及||其東帰|。請||言於 岡子究豈不"誠豪傑之士」哉。其於」学也篤。信」所」聞而固執」之。行事質直而方。言論明白。如"日月皎然』。文辞雄健富

はないかと、一読胸を打たれるものがある。なおこのほか淡窓の詩集『遠思楼詩鈔』(巻下)には、研介の長崎遊学のさい 淡窓が研介の人物と学問にどれほど 惚れこんでいたか、 おそらく師が門人に 贈る至情、 これに過ぎるものはないので

って天保一〇年(一八三九)一一月三日歿した。 子究|書」がのせてあり、研介によせた淡窓の愛情の深さがしのばれるが、 これらは割愛しよう。 に贈ったと考えられる「寄岡子究」なる漢詩一篇があり、 また『文稿拾遺』には自著『日新録』を贈ったさいの(®) 大坂に定住してからとかく健康を害したので家郷に近い岩国に移ったらしい。 しかしこの地で精神病にかかり、平生に帰 三年には周防岩国藩に招かれて医員にあげられた。しかしシーボルト事件以来、研介は神経をひどく労したものとみえ、 た。ときに天保元年(一八三〇)であった。翌年には A.B. Richerand の『生機論』を訳述、刊行しているが、その翌 とにした 研介は大坂で当時一流の蘭方臨床家であった斉藤方策にひきとめられ、 その女を娶って、 この地で 医業を開 江戸へ向って 日田をあ

淡窓はその死をいたみ、嘱されてつぎのような墓誌を書いた。

誌

鳴呼此岡子究之墓耶。余欲」作||之銘|。而無」禁||於我淚之先下||也。子究姓岡。名研。子究其字。 研介為」称。 伝||不朽||耶。若使||子究得||志於年|。則著述之富。生徒之衆。将」耀||百生|。又何待||予文|邪。顧予之文。果足」使||子究 浪華」。声誉日隆。不幸得」疾。帰臥郷里。蹇連多年。齎」志而終。嗚呼坪井之名。 今頃ṇ海内」。 而子究託ṇ一片石」。 説」。師ハ芸中井氏。肥吉雄氏」。又親従ハ蘭医」。窮ハ究精微」。於」是欲」有」所ハ著述」。学ハ文於予及筑亀井氏」。既而講ハ業 家世業」医。子究幼而頴敏好」学。 志在||大成|。 与||友人坪井信道|相謀。以||荷蘭医方。未ト弘||於本邦|。 周防平尾 欲」興川其 以

不朽¦耶。子究娶∥斎藤氏|。生||一女|。寿四十一。以||天保己亥十一月三日|卒。 略下

の書信によってもたしかめられるので、参考のためにかかげておく。 密で、両者の間に同志的な結合があったことを指している。それは天保元年一一月一〇日付で信道より研介にあてたつぎ 国に普及していないのをなげいて、その法を興そうとしたとあるのは、かつて信道の門に遊んだ研介と信道との交際が緊 若くして逝いた愛弟子をいとおしむ心情がほとばしっているが、文中、友人坪井信道と謀ってオランダ医方がまだわが

成 宜 園 と 洋 学(杉本)

御賢顧奉」仰候。 共、何分、肝心之学者に出群之人無」之、唯々一時の虚名と小利を貪る鼠輩のみにて、道欲」行而不」行、有志之士は不」 尤もと存候。併し小子に在りては失望に御座候。 過日愚意の程申上げ、 定めて御披見被\下候と存候。 江戸洋学家無数 時、教授斗りも仕居候は小子一人なり。此節塾生八九人と研究仕候。 尤も不才無術、 捷快之事は無」之、口惜しき次第 家とならんと欲し、滝野は病後にて雄志難」立、且速ならん事を欲し、青地は陰逸を愛し世味を厭ひ、教授も不」好唯自 御座候得共、 多分、 山師俗子而已。 一も取るに足不」申、 在職有力之中にも、 大いに 其説に心酔する 者往々御座候得 九月二日之貴書、十月廿八日相達、薫読仕候。云々、然者尊兄浪華永住御決定之旨、一々不」得」已に出づる趣、逐一御。 に御座候、今度、浪華御永住之貴書拝見、忽然西帰之念起候得共、宇老人の勧諭にて相止申候。此後、千里を隔候とも からの 読書に兀々たる耳。 大都の中央に出て赤幟を立て、 四方士を 待つといふ 人無||御座| 候。 不」堪||長大息| 候。 当 書を以て天下を導く了簡にて、一向、療治も教授もせず、 藤井方亭は官事忙しく、 殊に大志も無」之、 湊は一個之流行 堪」|忿慨」|候。此時、正心誠意之学士、興起せば、必ず千載之俗習を一洗して実学を一定せん事疑なし。宇田川老人は著

言あれかしと窃かに窺居申候。十一月十日、坪井信道。 二陳、昨夜、玄朴宅にて高野長英に面会致候。放蕩を絶ち、書生を教授し、大都を一震可」仕由、申し居り候。何卒如り

よほどの信頼感がなくては、こうした人物評までできないと思う。ここでは宇田川榛斎・藤井方亭・滝野玄朴・青地林

宗・高野長英など錚々たる東都の蘭学者が、かたはしから爼上にのせられているのである。

が広瀬家所蔵文書を調査中、はからずも岡子究著『療痔録』上下二冊を発見した。これについては章をあらためて吟味を 述はのこしていない。従来知られている蘭書反訳は前記 『蘭説養生録』 と 『生機論』 だけである。 ところが今回私たち 研介は達眼の先輩蘭学者によりこのように期待され嘱望されていたのであるが、そのすぐれた才能を存分に発揮した著

加えたい。

宜園に学んだわけで、これは他にほとんど類例がない、『淡窓旭荘書翰集』には、淡窓から矢田家にあてた手紙が七通ほ 宜園入塾とあるから、 生まれは文化一一年(一八一四)ということになろう。 淳の父連 も文化一二年に 入門していて、 ナレリ」とあり、さらに淳の長子宏も安政七年(一八六〇)青邨の園主時代に入門しているので、親子孫の五人までが咸 『懐旧楼筆記』文化一二年正月の条に「矢田連へ別府ニアリテ医ヲ業トス。後年其三子。淳。孝治。希一。皆予カ弟子ト 『入門簿』によれば、豊後国速見郡別府の出身、文政一二年(一八二九)一〇月一六日一六才で釈、鉄山の紹介により咸

業、一旦医院を弟孝治に附し大坂緒方洪庵に学ぶ。 安政五年コレラ流行、時に淳大坂にて蘭医のセニテンハムに虎病の治 どのせてあるが、いずれも挨拶状程度をでない。 るから。しかしのち淳が適塾にも学び、れっきとした蘭方医になったことはたしかである。なお次弟の孝治も別府で開業 で、それ以後シーボルトは一年間長崎の出島蘭館に拘束されていて、とても門弟をとることなどはできなかったはずであ 術を学んで居たので、 したが、希一と宏は勤王家として知られている。 ただ同書の註には「矢田淳字子朴、号柳村、 文政十二年入門、 後長崎に遊びシーボルトに 蘭法を学び、 別府北町に開 長崎でシーボルトに 蘭医方を学んだというのは誤りであろう。 なぜなればシーボルト事件の 発生は 文政一一年の秋 別府に一人の死を出 さなかったという。 明治三年五十七で歿した」とあるが、 文政一二年の入門

### 闫 武 谷 祐 之

政三年(一八二〇)筑前国鞍手郡高野に生まれた。字は元吉、濃蘭、鷗州などと号し、のち椋亭と改めた。 咸宜園では二 したのは、 天保七年(一八三六)のことである。 その部分の『入門簿』が欠けているので、淡窓の日記『醒斎日暦』(巻 一一)天保七年の項をみると、「二月十九日武谷祐之来謁。 居塾」とあり、その日塾中入りをしたのであろう。 さきに淡窓と洋学者との親交についてのべたさい、筑前の武谷元立についてもふれたが、元立の子祐之が咸宜園に入門

宜園

と洋

学

(杉本)

咸

権九級下に至り、都講に任ぜられた。

されて藩医となった。 弘化三年(一八四六)『接痘瑣言』を作り、 同志とともに牛痘法の普及につとめた。 慶応三年(一 も福岡藩洋学の発達に寄与するところが多かった。 八六七)祐之の建言により、藩医学校賛成館の落成をみた。このようにおなじく藩医であった父元立の志をついで、祐之 天保一四年(一八四三)大坂の適塾におもむき、緒方洪庵について蘭医方を学んだが、帰国後、福岡藩主黒田斉溥に召

日付書信によると、大坂における旭荘の評判をしきりに気にして、祐之に善処方を依頼している。この一事からも淡窓が 拾遺』に「顋』祐之稿に」として、つぎのような祐之の詩と文にたいする淡窓の評言がのせてある。 祐之にたいして、洋学者以前の人間として、格別の親近感、信頼感をよせていたことが察せられるのである。なお『文稿 淡窓から祐之にあてた書簡がいくつか残っているが、 おそらく大坂遊学中の祐之あて年月未詳の四月二二日と七月一七

諸体皆好。排律尤為||美観||。軽秀流動。絶無||牽合之痕||。雖||老手||亦所」難。

名章佳句、烱々輝↘目。予嘗云。詩能使∥読者不ൃ倦。乃可↘称∥名家∥。 武生殆乎庶幾矣。文遜∥於詩∥。然亦条理整然。若 加以"一年之読書」。養"其学識"。可"与^詩並立|也。

門弟としての祐之への期待のなみなみでなかったことが祭せられよう。

### 材工方式

頗ル才気有リシカ。今久留米ニ於テ声誉アリト聞ケリ」とあることによっても立証される。この養安の略伝は『久留米小頗ル才気有リシカ。今久留米ニ於テ声誉アリト聞ケリ」とあることによっても立証される。この養安の略伝は 元芳と名のったらしい。 それは『懐旧楼筆記』文政四年の 項に「元芳ハ先師西洋先生ノ嫡孫ナリ。 塾ニ在ルコト不」久。 さらに続編巻一一、天保一五年三月六日の条に同じく久留米両替町松下元芳一四才、飯田秀達の紹介で入門とでている。 「松下家系図」によってこれを吟味すると、さきの元芳はまさしく元芳の父養安にあたると考えられるが、養安もはじめ 『入門簿』巻一三、文政四年九月十九日の条に筑後三潴郡久留米両替町松下元芳が稲垣元周の紹介で入門したとあり、

松下養安ハ父ヲ寿庵ト称ス。世々我藩ノ侍医ニシテ、禄百五十石ヲ食ミ、竹間並格ニ班ス。義源公ノ病メル時、王人典 ヨリシテ漢方医ノ拙陋ニシテ為ルコトアルニ足ラサルヲ悟リ、弟牛島養朴・子元芳・済民等ヲシテ大坂緒方享庵ノ門ニ(株) 薬頭百々陸奥守及ヒ蘭医小石拙翁ヲ招カル。養安ハ専ラ拙翁ノ説ヲ主張セシヲ以テ罪ヲ得、侍医ヲ免ス。 然レトモ此時

入り専ラ蘭法ヲ修メシム。元治二年正月十八日歿ス。年六十一。

すると、同じく『久留米小史』にその大要がのせてある。 これによれば、 養安は小石元瑞(前述)の影響を強くうけて蘭医方に傾いていたようで、 そのために 藩医を免ぜられて なおかつ弟や子の元芳らを適塾に入れて蘭法を学ばせたものとみえる。そこで蘭方医となった松下元芳の略歴を吟味

同塾ニ在リ、元芳ニハ兄事セシナリ。今元芳慶応義塾ニ入ルニ及ンテソノ故ヲ以テ、専ラ賓客ヲ以テ待遇セリ。 ニ建議シ、元芳ヲシテ福沢諭吉ノ慶応義塾ニ就キ英語ヲ学ハシム。初メ元芳ノ大阪緒方享庵ノ塾ニ在リシ時、 苦勉励、深ク学理ヲ究ムルヲ得タリ。慶応年中江戸赤羽藩邸ニ在リテ、今井義敬英学校ヲ我藩ニ興スノ志アルヲ以テ官 元芳父ノ禄ヲ継キ侍医タリ。弱冠ニシテ広瀬淡窓ノ門ニ入リ、又中島泰民ニ就キ蘭書ヲ学ヒ、後緒方享庵ノ門ニ入リ刻(株) 之ヲ招ケトモ、藩ヨリ出サシメス。明治二年十二月ニ歿ス。年三十九。其辞世ノ詩ニ曰ク、 大ニ変シ、攘夷党跋扈セルヲ以テ、遂ニ其志行レス。諭吉元芳ノ才アルヲ以テ頻リニ出京ヲ促ス。 ニ在ル久シカラスシテ英語ニ通シ、帰リテ英語ヲ起スノ志ニテ官ニ請ヒ、英書ヲ数多購求シ帰国セルニ、久留米 且ツ長崎病院ヨリモ 其塾中

出漢入蘭又学英。差吾強仕末成名。対鏡啞然還一発。鬢辺染出雲千。

塾頭をつとめたほど、緒方洪庵の信頼が強かったことは、同輩の長与専斎の『松香私志』などにもみえるし、義塾で賓客 みられるように、元芳の咸宜園入門はまだ弱冠一四才のことであったから、淡窓の著述にもかれについての記述はすく 岡研介や武谷祐之の信任の厚さとは比較にならない。元芳の活動の場はむしろ適塾と慶応義塾であった。 適塾では

咸

園と洋

(杉本)

hik

ÍÍ.

園と

の礼をもって遇 せられたというのも事実であろう。(※) 庫」の名のもとに収蔵されていることを付言しよう。 ちなみに 久留米市立図書館には 元芳旧蔵の蘭書二十余冊が

### 田 上 野 彦 馬

係の詳細はわからない。ただし木下逸雲が青邨にあてた書翰にこの間の動静がくわしく伝っているということである。 簿』には一四才とあるが、これは数え年一六才の誤りであろう。 私の調査ではいまのところこれ以上咸宜園や淡窓との関 介で咸宜園に入門した。 このことは 淡窓の『再条録』巻一一にみえているので、 淡窓晩年の 門人である。 上野俊之亟の三男として天保九年(一八三八)八月二七日長崎銀屋町で生まれた。嘉永六年(一八五三)吉岡晩成の紹

の生産を家業の中心とし、長崎製硝所を経営していた。天保一一年 (一八四〇) 入港の蘭船がもたらした Daguerreotipe ていた。元来、俊之亟は化合知識を応用して、時計製造・鋳金・鍍金・製薬・長崎更紗等の製造のほか、大がかりな硝石 (銀板写真機)を入手してから苦心研究の末、撮影に成功し、本邦写真術の元祖となった。 そこで彦馬のその後の事蹟を簡単に記すと、かれは父俊之亟とともに蘭学の造詣がふかく、とくに化合の研究にすぐれ

び、安政五年(一八五七)長崎大村町の舎密試験所に入門、ここで写真術の研究にあたった。万延元年(一八六〇)渡来 真師となって活躍した。明治三七年六七才をもって病歿した。 したフランスの写真家ロッシエについて新技術を学びとり、間もなく津藩藤堂家に仕えて、藩黌で舎密学の講義をし、文 久二年(一八六二)『舎密必携』を著わした。 その年致仕して長崎に帰り、 彦馬は 咸宜園の課程を了えると長崎に帰り父の遺業 をつぐために、 和蘭通詞名村八右衛門 上野撮影局を創業した。 (花渓)について 蘭語 西南戦争には従軍写 を学

者数人の動向に吟味を加えてみた。その結果、咸宜園自体は儒学を主柱とし、終始漢学塾としての立場を守りながらも、 咸宜園と洋学との関連性を明かにするため前章における淡窓らの教育方針と洋学観につづいて、本章では門人中の洋学

親交を結んで有為な門人らをそれぞれおくりこみ、洋学修業を依嘱していることがあきらかとなった。門人で洋学者とな 日本の将来をきり開いていくうえで、洋学が圧倒的な役割をになうであろうことを予見し、そのために知名の洋学者らと ったものも、漢学より洋学への転向というよりも、高野長英がいっているように、むしろ咸宜園で読書・作文の基礎訓練

をうけたのち、洋書を読解し翻訳文をつくることにメリットを感得したと思われる。

そなえ、実学主義を標榜していたところから、洋学との連結が一そうスムーズにいったと考えられる。 討を要するが、咸宜園の教育方針が、固陋で閉鎖的な漢学塾とはちがって開明的であり、近代的システムの先駆的形態を りもプラスとしてはたらいた度合いが多かったにちがいない。この点は洋学全体についてもいえることで、なお充分な検 さらに咸宜園における儒学理論の思想的錬磨とその合理主義の習得が、洋学の論理の把握にとって、一般にマイナスよ

### Ē

- (1) 佐藤栄七『日本洋学編年史』による。
- (2) 高野長運『高野長英伝』二〇八頁。
- (3) 『淡窓日記』巻一二、文政二年四月十三日の条(『淡窓全集』巻下所収本一五八頁)に「研介入塾。於」是書生居」塾者、凡三十人 多。」とあり、『入門簿』巻九(『―全集』巻下所収本一四頁)の入門記事と合致する。
- $\frac{2}{4}$ 淡窓の『文稿拾遺』(『―全集』巻中所収本三六頁)にのせた「岡子究菜誌」によると、「(子究)学三文於予及筑亀井氏二 とあ
- (5) 『日本洋学編年史』四三六頁。
- (6) 同右、四七六頁。
- (7) 『懐旧楼筆記』(『淡窓全集』巻中所収) 三五一頁。
- (8) 『広瀬淡窓旭荘書翰集』四四頁。
- (9) 『淡窓小品』(『淡窓全集』巻中所収) 五頁。
- (1) 『遠思楼詩鈔』(『淡窓全集』巻中所収)二八頁参照。

成 宜 闌 と 洋 学 (杉本)

咸

- 11 『文稿拾遺』(『淡窓全集』巻中所収)八頁参照。
- 『一洋学編年史』四三七頁所載。
- 13 同右(同右所収)三六頁。
- 14 『入門簿』(『淡窓全集』巻下所収)四九頁。
- 15 『懐旧楼筆記』(『淡窓全集』巻上所収)一九七頁。
- 16 『―淡窓旭荘書翰集』二二四頁。
- 17 『淡窓全集』巻下、五九八頁、
- 18 『懐旧楼筆記』(『淡窓全集』巻上所収)四七三頁参照

井上忠「種痘法の伝搬過程」(『西南学院大学文理論集』昭和三二年度)参照。

『淡窓旭荘書翰集』二〇八~二一〇頁参照。

19

- 21 『文稿拾遺』(『淡窓全集』巻中所収)五〇頁。
- 松田豊「陶山、松下両医の遺書解題より米藩洋学の経路に及ぶ」(『筑後』一五の二、昭和一二年)所蔵。 松下家系図(略図)

松 下 元 丈——(寛政一二年死)——文之進(文化七年死、四七才) (文之進の子) (牛島家の養) (死、六一才) ΰÝ 元

- 23 『懐旧楼筆記』(『淡窓全集』巻上所収)二六四頁。
- 24 戸田乾吉『久留米小史』巻二一、一四丁表。
- 25 同右、裏。
- 26 松下元芳については今津健治「久留米の蘭学者松下元芳について」(蘭学資料研究会『研究報告』一二九所収)を参照。
- このことは梅本貞雄「上野俊之亟と上野彦馬―本邦写真術の開祖―」(蘭研『研究報告』五五、所収) にでているが、 筆者は

未見。なお彦馬の事蹟については右論稿に拠るところが多い。

28 前掲、中島市三郎『教聖・広瀬淡窓の研究』第五淡窓先生と明治学制、参照。

# 四、広瀬家先賢文庫所蔵の洋学関係写本

園図書館に寄託されている。書籍の大部分は漢籍と国文学書であるが、 なかに百数十点の洋学ないしは対欧米関係書類が ふくまれている。 刊本は一応除外して、 関係写本を適宜分類して書名ならびに著者名、 蔵写本・経営関係文書が収蔵されており(目下整理中であるが、なお書籍・書簡等は未整理)、 今日広瀬家所蔵の文献史料としては、 同家先賢文庫にきわめて多数の同家先賢遺稿と手訳本 (大部分は写本)、 咸宜園旧 冊数、 相当数の刊本類が 日田市立咸宜 印記、 句読点、傍点、傍

(-) 理 数

々、

外国地名・人名等の読み片仮名を付す。

線、

書入れ等を列記してみると、つぎのとおりである。

窮 理 通 半、二冊、帆足万里著、 宜園蔵書印・田益月加印、 黒・朱字句読点・朱字傍点多数、 書入れは少

泰 酉 水 法 半、二冊、明、熊三抜撰説、徐光啓訳、石川文庫印、ISIKAWA BEHODER DATBOEK TOE 句読点、頭註に朱・黒字誤字訂正、図に朱字註

書 大、一冊、宝曆六年子三月の表記のある和算書、洋学の影響はない印、句読点、頭註に朱・黒字誤字訂正、図に朱字註

方 青 法 囊 秘 鑑 秘 訣 録 半、 大 刪 刪 書入等なし 華岡青州著、書入等なし (<del>=</del>)

医 算

学 覚

法

精 選 方 口 訣 半、二冊、書入等なし

咸

宜

菜

لے

洋

学

(杉本)

咸

三四

療痔録 (上巻病論治法、下巻薬方器械) 大、二冊、岡研介著、(自筆) 朱筆訂正多し

傷 寒 首 半、 冊、田代連公山著、夥しい附箋を付す、 大乙堂旧蔵

(≡) 地 傷寒論 一証便宜 誌 半、 冊、田代連公山著、夥しい附箋を付す

輿 地 誌 (略) 大、七冊(三冊欠)、青地林宗訳、旭荘珍蔵印、傍点各処にあり

職 方 外 記 大、二冊、艾儒略 Giuglio Aleni 著、中島豊足印、朱筆訓点、字句訂正、巻六の末尾に「文政 元寅三月門生奥州松前人斎藤豊自をして之を書写せしむ、中島豊足印」とあり

增補采 覧 異言 大、一三冊(第一冊欠)山村昌永増訳、旭荘珍蔵印、朱字句読点・傍点、黒字書入れ多数、 に「明史」・「度数譜」より引用、とくに巻五利未亜等に多し 頭註

(帝爵魯西亜国史) 半、三冊、旭荘珍蔵印、諸処に朱字句読点あり 半、四冊、和蘭勃盧垤爾撰、馬場貞由訳、旭荘珍蔵印、書入等なしずルウデル

魯西亜誌

遠探

1.隠要録

(四) 漂 水夫漂流記(内題、水夫仁平漂流日記) 流 記 半、一冊、林洞海著、旭荘珍蔵印、 書入れ等なし

漂流安南記(一名、南瓢記) 半、一冊、(枝芳軒著)旭荘珍蔵印

北 、魯西亜人入津))並奥州漂流人一件 半、一冊/文化元年子九月)並奥州漂流人一件 半、一冊 聞 大、 四冊、 桂川甫周著、 旭荘珍蔵印 朱字傍線、頭註少しあり

略

魯敏孫漂荒紀事 半、 三冊、 **暎咭唎**国魯敏孫 <sup></sup> 昭須著、 黒田行大道(麹盧)再訳、書入れ等なし

(Ŧi.) 歴 西洋列国誌 史 (西洋雑) (西洋列国史略) 半、一冊、佐藤百祐 (信淵) 著、 旭荘珍蔵印、

書入等なし

那 波礼 温 略伝 半、一冊、 旭荘珍蔵印、 三頁にわたり頭註書入れあり

西 洋 雑 記 半、二冊、 邦貞誌」とあり 山村才助著、 旭荘珍蔵印、末尾に「干時文化六年已己二月十八日阿州眉山の居士藤原

万 国 雑 抄 半、二冊、「万国伝信紀事」をふくむ、書入れ等なし

(大) 潕 防 軍 事

潕 曲 蟲 語 半、 五冊、 安政元年十二月太政官符、幕府教令、附言(安政二年藤原保定)、書入れ等なし

籌 海 私 議 半、 刪 (塩谷)宕陰未定稿、旭荘珍蔵印、朱字句読点あり

微 衷 半 ₩ 大槻盤渓著、 旭荘珍蔵印、朱字句読点、傍線あり

献

擬 論 海 防 半 刑 板倉勝明著、書入れ等なし 巻末に「右三国通

三国通覧(図説)

大、

₩,

覧補遺二巻得諸攤買慶書中不知為何人作、其説頗有拠、 但誤訳不少、文字亦訛、今為加訂正、 読

補遺二巻を付す、林子平著、朱字・黒字頭註、朱字傍点若干あり、

之亦可以見概略云、宝壺老人閲完、因題丁卯中元日」と記す

北 辺 紀 聞 大、一冊、 文化八年辛未夏蝦夷地江魯西亜人渡来一件·辛未魯西亜書簡和解 奈志利記等八編の文書より成る、朱字書入れ多数あり (馬場佐十郎)・久

酉 洋 秘 套 半、 一冊、 夢物語 (朱字傍書あり)・夢物語批判・西洋群議 ・慎機論・夢々物語・刑書等蛮社遭

鎖 玉 論 半、 刪 ケムペル著、 志筑忠雄訳、 固有名詞に朱字傍線を引く

厄関係書より成る

日本紀事抄 (西客堅協應日本紀事第四編抄訳) 半一冊、 ケムペル著、高橋景保訳、旭荘珍蔵印、書入等なし

俄 羅 斯 武 備誌 半 冊, 旭荘珍蔵印、魯西亜国兵勢幷合編之事六カ条、陸兵之事一二四カ条より成る、書入れ等

咸

宜

園

لح

洋

学

(杉本)

なし

戦 秘 詇 半、一冊、佐藤椿園 (信淵)

归 片戦 争

(出)

陸

片 章 程 半、 一冊、書入れ等なし

鴉

鴉片始末附考異 半、 **₩** 仙台、斎藤馨子徳(竹堂)著、周芳、清狂方外史考異、一節ごとに考異を掲ぐ

頭註朱字書入れあり、千八百三十八年より四十二年までの和蘭風説書より所る、

字句

の註釈多し

鴉

片

招

禍

録

半、

一 冊

清朝討英夷檄文 大、一冊、清、金大理、旭荘珍蔵印、

唐人答書(付外船接近) 半一冊、問嘆咭唎唐生意情形禀覆干左等の文書、付録に日向国福島都井浦に接近の外船 書入れ等なし

風

件を載す

(11)

風

説

類 数 種 半、一冊、安政三辰年九月、亜米利加官吏ゟ差出候横文字和解差上候儀申上候書付・霜台丙辰祭 議・辰年(千八百五十六年) 別段風説書より成る(安政三)

合 本 半、 一冊、信州松代地震関係文書・蒸気船「ゲーデ」出島千八百五十五年九月二十七日付、日本

風

説

類

風 説 書辰七月 半、一冊、千八百五十五年の記事

差越候指揮役船将次官グファビユス書翰等より成る

別 段

雑 往和 市藤 大告 意 (交易仕法)密附夷船一件 半、一冊、千八百五十六年、 差越どんくるくるきゆす書翰和解・辰八月伊勢守御渡 書 半、 一冊、安政四年二月長崎入津之唐船より差出候風聞書写、千八百五十七年二月差越別段風説

書のほか加藤清正に関する文、かけ弁慶を綴り込む

西英 土吉 風利 説紀 書略 寅十一月借、出雲松城儒官妹尾精斎而写於錦織氏」と記す大、一冊、紀略は清陳逢衡著、風説書は表題なく、太平天国乱を記述、 巻末に「此二本嘉永七甲

星 艖 異 聞 半、 HH, 甲辰年和蘭国王書簡幷献上物目錄和解、弘化二年六月朔日、 老中より和蘭政府への反

合 衆 玉

翰より成る

(tt)

玉 書 翰 半、 ₩, 亜美理駕大合衆国大統領、 同水師提督の書翰和解七通より成る

右と大体内容同じ

**亜墨利加使節申立之趣** 

合衆国書翰和解 半 ₩,

二月四日亜墨利加使節差出ム書附和解、近日雑報〇出游外国論紀元一千八百五十

半、一冊、十月廿二日備中守宅におゐて亜墨利加使節申立之趣、亜墨利加使節対話書、

+

**亜魯英仏四協約翻訳和解** 半、一冊、 外に内藤紀伊守殿御渡候御書付写等七通の文書写を綴り込む

紙

**亜墨制加通詞官** 

聞

ものは附三月御触幷諸家ゟ御届 寅十二月豆州ニ而某筆記 ホットメン内密申上候書和解

年十二月豆州ニ而某筆記(一種の風説書)ものはつけ、その他合せて七通の文書を綴り込む 嘉永七年八月豆州下田表江アメリカ船渡来通詞官ホットメンより内密申上候横文字和解、安政元

レ 乃告牒記録の事等、末尾に「右エゲレス板評判記ニ添テアリシ片仮名文ナリ」とあり 半、一冊、外国人日本通商乃企亜米利加人当今日本へ志望の 事を載たる公頭

つぎに参考までに先賢文庫もしくは咸宜園図書館収蔵の洋学関係刊本を列挙するとつぎのとおりである。 咸 宜 霐 洋 (杉本)

لح

(-)地

理

坤 輿 义 識正続 九冊、箕作寬(省吾)著、弘化二年刊

地 学 正 宗 八冊、杉田玄端訳、嘉永三年刊

滅 童 絵万国 環 志 噺 略 六冊、仮名垣魯文著、五斎芳虎画、万延元~文久元年刊 一〇冊、清、徐継畬著、井上春陽等訓、文久元年刊

(=)天文・物理 一冊、明、游子六著、一六七五年刊

天

経

或

間

初 学天文指南 五冊、馬場信武、宝永三年刊

気 海 観 瀾 一冊、青地林宗著、文政一〇年刊

海 防 議 一四冊、兀老尹著、馬場佐十郎・杉田予(立卿)・青地林宗合訳、文政八年刊了 三三冊、塩田順庵編、安政元年刊

遭厄

日本紀事

(≡)

海防·外交

環海航路日記(庚申亜米利加紀行) 二冊、広瀬保庵著

西 洋 雑

(四)

西 車 図 会 一世 長谷川小信画

西 洋 事 情 三冊、 福沢諭吉著、慶応二年刊

五. 雑 組 八冊、 明、謝肇淛著、寬文元年刊

さて右の広瀬家所蔵の洋学・対外関係書類の傾向(写本・刊本をふくめて)を概観すると、海防・軍事に関するものが 六 合 叢 談 八冊、 原名 Shanghai Serial (1857・1~58・2)、官版

らに風説書や合衆国関係文書がこれにつぐことは、幕末期における咸宜園の時局認識の一端をしめすものと考えられる。 われず、洋学知識はもっぱら著訳書によってもたらされていたと想察される。そして海防・地理の書がもっとも多く、さ 洋書もしくは語学書の類がまったく欠如していることである。 この点、咸宜園では当然のことながら語学の研究はおこな いたことと、後述するように旭荘の苦心してつくった特別のルートによったものであろう。 とくに一般には入手しがたい風説書や外交文書が手にはいったのは、広瀬家・咸宜園が西国郡代と密接な関係をたもって (五部)、阿片戦争 (五部)、歴史 (西洋雑、七部) となっている。このコレクションで特徴的なのは、蘭語や英語などの 番多く(一三部)、つぎが地理(九部)で、以下風説書(七部)、合衆国(七部)、 医学(六部)、 理数(六部)、 漂流

要を提唱し (実現はみなかったが)、 さらに 知名の 蘭学者と よく連絡を とって 門人たちをそれらの 蘭学塾 におくりこみ、 覧し、騰写したことなどにも、その外来文化にたいする見識のほどをうかがうに足るものがあるが、残念ながらその写本 洋学への関心のなみなみでないことをしめした広瀬淡窓自身の手訳本もあるかと思うが、いまのところわたくしにはその 度研究したかという事実をひきだすことは容易ではない。もっとも新しい学校制度のなかで蛮学=蘭学の一科を設ける必 は残っていない。 証左はつかめていない。さきにものべたように、淡窓が当時禁制のキリスト教教義書『三山論学記』などを岡研介から借 しかし咸宜園ないし広瀬家に洋学・対外関係書が多数残存しているからといって、それだけで特定の誰かが何時どの程

は、つぎのような事実を伝えている。 面にでて活躍し、 るのは、淡窓も強い関心をもち、次弟久兵衛が実践にあたった広瀬家のすぐれた治水術と無関係ではないように思われる。 ところで前掲写本のなかには、「旭荘珍蔵」の印記のあるものが一五部ほどふくまれている。 これは早く大坂・江戸方 しかしたとえば『泰西水法』のごとき、熱心に研究されたあとが歴然としており、とくに挿図に朱字の註が細記されてい 幕末志士たちとも関係のあった広瀬旭荘が蒐集したものと考えられるが、このことに関して旭荘の書簡

咸 宜 園 と 洋 学(杉本)

嘉永~安政年間とみられる謙吉(旭荘)から大人(淡窓)にあてた二月十三日付書簡によると、

一、外国之事坤輿図誌之外写本ニて手に入兼候。私千辛万苦所集数十百冊、不遠帰省之時可携帰、何卒今の内より筆工

一 同持帰滞留之由為写度預入申上置候。

二十人計仕立置被下度、日記も大凡三十冊程出来候。

- つぎに嘉永五年閏二月余日付旭荘より青邨へあてた書簡には、
- 一、西洋書類一日も早く御返却、右ハ小生困厄中より数百金を抛て集候故甚珍重候。箱ニ入れ御送可被下、 耳損し候事

プ畏値

さらに安政三、四年ころとみられる二月七日付、謙吉より青村あての書信にも、(等)

、唐人の書一巻入手、 去年八、 九月迄の事有之誠ニ大変也。 朱氏ハ形も無之、 洪秀泉と申者張本、南京ニて帝と称 御写可宜候。皆奥右筆の手より出候分也。秘々。 シ、清の罪ヲ数ル詔書二通愉快也。其外珍書英魯墨の一件五冊入手、当時府内邸ニ為写候。 其内南兄方ニ可往、其時

前掲『清朝討英夷檄文』か『唐人答書』かを指すものと思われる。 さらにそうした秘書の類を幕府の奥右筆からのルート 国人の書と英露米関係の書類を入手したから、いずれそちらでも写すようにと指示しているのである。 なお唐人の書とは 珍蔵の西洋関係書を速急にしかも大切にあつかって送り返してほしいと頼んでおり、最後のものは長變賊の乱に関する中 れ等によって、相当によく熟読され、研究されていることが察せられるのである。 たものと推定して、まず間違いあるまい。 で入手したことまで付加しているのも注目をひく。いずれにしても「旭荘珍蔵」の印記のある書類が、旭荘の苦心蒐集し から日田へ持ち帰る所存なので、あらかじめ筆工を用意しておいてもらいたいと淡窓に依頼しており、第二のものは旭荘 とある。右のうち第一の書翰は、旭荘が外国関係書を苦心惨胆して蒐集し、それが数十百冊に達したが、帰省のおり大坂 しかもこれは洋学関係書の全体にも該当することであるが、傍点、傍線、書入

れ自身の心境をあざやかに語っているので、二、三を例示しよう。 それでは旭荘は何故このような熱意をもってこうした書類を集めたのであろうか。この点についても、 旭荘の書簡がか

、江戸の方洋学流行候。唐の歴史而已ニテハ史家と不可謂。五大州の事を成丈吟味致度物也(安政二、三年七月一〇

日付青村あて)。

洋学は如日升。程朱学も林家及梅田(無類の)評判甚不好(安政五年一〇月一一日付青村・林外あて)。 年?七月一日付あて名なし、多分青邨・林外あて) 蘭学へ前代未聞、詩文等へ先払地候。万巻の書を読候ても、蟹行之文字を不知候ては、活計には成兼候勢

られている。幕末に近づき、漢学とくらべて洋学の優位がいよいよ明確になってきた、歴史の容赦のない変転ぶり(必然 洋学興隆の機運に棹さして、横文字を知らなくてはもはや「活計」にもさしつかえるにいたったとする深刻な感懐がこめ そこには「中華」だけでなく、ひろく五大州にむかって眼を開くべきことを説き、そのためには旭日ののぼるがごとき

にたいする旭荘ののっぴきならぬ認識が浮彫にされているではないか。

較のうえに立って海防を論ずるにいたるのであるが、その方面のまとまったかれの論著としては、「識小編」(『梅墩叢書』 識であって、英仏等西洋諸国の侵略をまぬがれるためには、まず人材を登用すべきことを提唱するとともに、防禦手段と 坤、所収)と「異船議「(同上、乾、 所収) 二小篇がある。 これらは開港前後の緊迫した危機観のもとに記された時局認 こうした認識のもとに、洋学に強い関心をもった旭荘は、当然にもヨーロッパの地理書・歴史書の翻訳を渉猟し、彼我の比

五・巻之六には、「大莫臥児は民口一億四五千に余る由」・「魯西亜の盛なるは伯特禄の 時より始る」・「今は洋夷と交通の (ナポレオン・ボナパルト)・話聖東(ワシントン)等英雄の事蹟を記して論評を加えているし、『九桂草堂随筆』 しかしこのほか「児孝ニ示ス書」 には歴山王 (アレキサンドル 大王)・伯徳緑 (ペートル大帝)・那波列翁勃那抜児的 の巻之

しては大砲・大舶・焰硝を造る術を進めるほかないことを力説した献策である。

\_\_\_\_\_\_

咸 宜 園

と洋

(杉本)

風あり」・「那波礼翁徳量なきことを知べし」といった知見がのせてある。また旭荘の浩翰な日記『日間瑣事備忘録』にも しばしば西洋ないし洋学関係記事が散見する。それらを一覧すれば、旭荘の西洋認識が当代の儒者・漢詩人中では傑出し こと起れり」・「今迄の頑固なる習風を変じ云々」・「西洋の書を研究せざるべからず」・「蒸気船の工夫をなさしめば云々」 ・「漢人は迂洋人は捷なり」・「異国の戦には大船を造」・「洋人の我邦 に上る文頗る倨る」・「亜墨利加今は天下を官 にする

観を堅持するものであった。 ただそうした制約内では、 旧弊にとらわれない自由濶達で、 しかも 合理的な言説 をおこな が、旭荘の洋学観をここに約言するならば、結局儒者の立場からの「採長補短」の域をいでず、「東洋道徳、西洋芸術」 しかし本稿では旭荘の対外認識や海防論に深 いりする余裕はないので、 その 詳論はあらためて 他日を期したいと 思う

い、まま卓見の閃きをしめしている。

ていたことがわかる。

の上述の「旭荘珍蔵」本の存在理由について、一応的確な理解をもつことが可能になると思う。 富な洋学知識を身につけざるをえなくなったことにあろう。以上のような事情を考慮にいれるならば、広瀬家先賢文庫中 関係も浅からざるものがあったため、切実な危機観の裏づけがあり、しかも開港後の内外情勢の急展開によって、 庭・高島秋帆・佐久間象山・鈴木春山といった当代一流の洋学者とも親交があり、また国事に奔走した志士たちとの交友 旭荘のこのような洋学観は、長兄淡窓の洋学観を継承し、敷衍するものであったが、淡窓と異なるところをあげるなら 時世が一層切迫した幕末期に、 京坂を中心に活躍し、 坪井信道・岡研介・青木研蔵 らをはじめ、 大槻磐渓・新宮凉

下」の二巻二冊から成り、二二枚の小冊子である。上下巻ともに冒頭に「周東 味を加えたい。といっても管見にはいったものは、岡研介著の『療痔録』と林洞海著『水夫漂流記』の二部だけである。 そこでまず『療痔録』からみると、 そこでこの節の本筋にもどり、最後に広瀬家洋学関係書のなかにふくまれている咸宜園門下生の著述について一応の吟 これは書目にも記したとおり、「療痔録病論治法巻之上」と「療痔録薬方器械巻之 岡研子究著」と明記され、おそらく研

全体が七章から構成されているわけである。いかにも草稿といった感じで、いたるところで朱字の訂正が加えられ、下巻 仮名がつけてある。目次は、上巻が肛門第一、痔瘻第二、肾痔第三、脱肛第四、痔血第五、下巻が薬方第六、器械第七で、 介の自筆本とみられる。表紙もない仮綴で、罫紙に楷書で認められ、漢文で記されているが、全部にわたり返り点と送り

にはとくに黒字と朱字の頭註が一つづつある。 内容の検討は医学の専門にわたり、その任でないので、さしひかえるが、幸い下巻末尾に本文とは別の字体でつぎのよ

うな論評がのせてある。

文政戊寅之季秋療痔録稿成矣。於是乎、黒得受焉。盍此書之所記、拠西洋実説、加以自己之試験。雖蕞前方法兼備、

この評言を書いた黒とはたれか未詳であるが、これによって、まずこの書が文政元年晩秋の作であることが知られる。 実黒眼之昏暗、自今懸明鏡也。希令世之未達焉者一見、則亦為暗夜之燭邪。是景之微意也、作者之本志也。

もこの書の執筆時には、かれはすでにオランダ医学を一応身につけていたこと、痔の治療書としてはそれまでにない画 研介が咸宜園に入門したのは文政二年の四月であるから、それより半年ばかりまえの研介二○才のときの作である。 述目録に新鋭の一書を加えることになり、まことに貴重な存在といわねばならない。 か、蘭書反訳に『生機論』と『蘭説養生録』がある程度で多くを伝えなかっただけに、広瀬家所蔵のこの書は、かれの著 的な作であったことが、この評言からわかる。従来研介の著述は、『老子註』・『周礼解』・『天造堂漫筆』など漢学書のほ

である。 本書は内題に「水夫仁平漂流日記」とあり、「林洞海編著」と明記してある。 現代教養文庫の『日本人漂流記』 (昭和四二年)の著者川合彦允氏の御教示によると、この漂流のケースは従来から知られているが、林洞海編著のこの書 つぎに『水夫漂流記』にうつる。広瀬家には漂流記が五部一○冊も現存するが、そのうちもっとも珍奇なのがこの書物

景

لح 洋

(杉本)

は未見とのことなので、簡単に内容を紹介する。

咸

岡領野田の大田辺海岸に送り届けられた。その間の漂流の顕末と外国船内の状況や水夫仁平らが習い覚えた英単語等を筆 記編纂し、最後に漂客の言をもとに漂流図と外国船の図を作って掲載、この船を米国の捕鯨船ならんと推察している。 で暴風にあい、漂流して越年、三月二〇日ごろ生残りの四人が外国船に救われ、四ヵ月間同船上ですごし、六月末奥州盛 港を出帆したが、九月二五日ごろ江戸品川沖に着船、米は深川貸蔵に収め、江戸からは空船で一○月一○日ごろ浦賀を出 肥前国佐賀宮ノ町竹富熊吉の持船、 志摩浜島でアラメ五六百石を積みいれ、一一月一○日ごろ同所を出帆した。 ところが同月二二日ごろ紀州比井ノ岬 千五百石積一七人乗の権現丸は米を積みこみ、弘化三年(一八四六)七月一三日同

ら、海防問題にも関心のふかかった淡窓や旭荘とも何ほどかの連絡があり、一本を多分旭荘に贈ったものと推定される。 うな直接のつながりはないかもしれないが、 やはり 小倉領漂流民の事件を、 藩に禄仕した 時期 にとりあげたのであるか のことであるから、この漂流記の成立も小倉藩医時代であると思われる。したがって咸宜園とは岡研介の前記の著述のよ 何時ごろかいまのところ未詳であるが、おそらく天保三年江戸にでる前のことであろう。上述の漂流事件は弘化三、四年 泰然の旧居をつぎ、医業を開いたが、嘉永三年(一八五〇)にいたり小倉藩医にとりたてられた。 淡窓の門を叩いたのは 立長雋の門にいり、西洋医学を修めたのち、 佐藤泰然とともに長崎に遊学、 間もなく江戸に帰り(天保四年)、薬研堀の ところで林洞海は豊前小倉の出身、文化一〇年(一八一三)の生まれであるが、天保三年(一八三二)江戸にでて、足 異船語」としてかがけた英単語の発音も、水夫仁平からの聞書であるからきわめて不正確ながら、とにかく耳で聞い

と結んでいるところなど、蘭学者林洞海の力量を存分に発揮しているのをみることができる。 推定して船形を図示し、「然レトモ皆是余カ推量ノ憶説也……具眼博覧ノ君子参互考訂セハ或其何ノ 国成事詳定スベシ」 近と推定して漂流図を作成していること、漂民を救助してくれた外国船を、「共和政治州(アメリカ合衆国)」の捕鯨船と 一五度の南洋(ガロリン諸島)、北は北緯五〇度近くのアラスカ南方、東は米本土のアラッテリー・ウハンユウフル? た五二の日用単語を書きとどめているし、「興地図ニ拠テ其漂流ノ行程方位ヲ考フルニ」として、 漂流の路程を南は北緯

以前脱稿、文政三年刊行、五巻)をあげることができる。この書物は明和元年(一七六四)南海に漂流して数年をボルネ 味ぶかいものではないけれども、これまでその道の専門家の間にも知られていなかったとすれば、それだけでも貴重な文 つけて世界地理学や博物学の知識をもって考証を加えたもので、 漂流記中の異色編である。『水夫漂流記』はこれほど興 オ島ですごし、同八年(一七七一)長崎に帰還した筑前糸島郡韓泊の水主孫太郎の数奇な漂流譚を興勝が筆録し、按文を 北部九州における類似の漂流記としては、 かってわたくしも検討した 筑前の洋学者青木興勝著『南海紀聞』(寛政六年

国考』等(何れも未刊)の世界地理書も著わしているから、漂流譚にも強い関心をもっていたことは、当然考えられる。し かも当時日本近海にさかんに出没し、開港の一導火線ともなった米捕鯨船の内情の一端を伝えている点、一層注目に価す 林洞海はのち幕府の医官に抜擢された人で、 著書として『窊篤児薬性論』 は有名であるが、『魯西亜本紀』・『北米合衆

献といってもいいと思う。

1

るであろう

 $\widehat{\underline{2}}$ 本稿二、九五頁参照。

拙稿「豊後日田の広瀬家史料の調査によせて」(『日本歴史二七二号所載)参照。

- 3 『広瀬淡窓旭荘書翰集』四一八頁。
- $\widehat{4}$ 同右、四八八頁。
- 5 四九二頁。
- 6 四五四頁。
- 7 五九〇頁。
- 六一二頁。
- 咸 宜 彚 ع 洋 学 (杉本)

减

- ニナ
- 9 頁)、旭荘の弘化五年? 八月二五日づけの書翰(『広瀬淡窓旭荘書翰集』三八〇頁)によれば、「此本ハ府内公ニ显し度云々」と 黒船の浦賀来航のさい、 慨然 として 幕府に献じて、 憂国の至情を披歴 したものといわれるが (橋爪兼太郎『広瀬旭荘』三七
- 10 行所にて再吟味とさり、旭荘の幕末経世論著が安泰でなかったことを物語っている。 未刊本、広瀬家先賢文庫所蔵、なお年月日不詳の旭荘より青邨あての書状(『―書翰集』四九三頁)によると、「梅墩集」も奉
- (11) 『梅墩叢書』乾、所収
- (12) 国書刊行会本『百家随筆』第一所収本七~九頁、目録参照。
- (13) 『日本洋学編年史』四四三頁参照。
- (4) 同右、四四五・四五五・四八二・四九六・五三二各頁参照。
- 拙稿「筑前蘭学事始考―青木興勝の事歴を通じて―」(『九州文化史研究所紀要』 一二所収)五一~六一頁参照。

# 五、むすび

ゆる漢学者による「採長補短」式の摂取というよりは、むしろ幕末内外危機に直面したかれの時務的な認識であり、 究にあったが、Hの淡窓の洋学受容思想はともかく、Hの全門下生にわたる検証は至難の業で、本稿ではわずかに史料の 的な立場からの受容であった。開港後の外交関係文書の残存なども、そのような意味で納得できるように思う。 の洋学研究にあることを知った。しかし旭荘の習得したものは世界地理・西洋史の翻訳知識の程度であって、しかもいわ 文献の調査・整理の進捗につれて、筆者の関心は選びだした洋学関係書類にむけられたが、その面でも門下生関係書とし うえで立証可能な岡研介・松下元芳・矢田淳・武谷祐之・上野彦馬の五人に絞らざるをえなかった。 ところで広瀬家所蔵 咸宜園と洋学との関係について、研究の出発点は臼広瀬淡窓の教育方針と臼これにもとづく門下生の洋学習得過程の追 岡研介の『療治録』と 林洞海の『水夫漂流記』しか みあたらず、この場合の問題の核心はむしろ広瀬旭荘

とはいえ、本稿は筆者のこれまでに調査しえた範囲内での一応の成果報告であり、旭荘関係史料(たとえば『日間瑣事

備忘録』や書簡類)の検討もまだ充分でなく、したがって旭荘の洋学思想・海防思想を掘りさげることはできなかった。 本稿の諸構成要素が渾然と結びありためには、なお一層の調査研鑚を必要とすることを痛感しつつ、この序説的な論稿の

筆をひとまずおくこととする。

### Kangien (咸宜園) and the Western Learning

### Isao SUGIMOTO

This monograph is a report on the results obtained by my research about the relations between Kangien and the Western Learning (洋学). Kangien is the private school established by Tansō Hirose. This research forms a part of my synthetic studies on Hita and its environs (in Bungo-no-Kuni), which were the domain of the Tokugawa Shognate. This private school became famous by the liberal and broad-minded educational principles, and the number of Tanso's pupils gathering from all over the country reached to four thousand. It was the latter days of the Tokugawa Government and so we can estimate that many of those pupils opened their eyes to the Western Learning in accordance with the needs of the times. Therefore the relations between the Western Learning and Kangien, the private school of Chinese classics, was more intimate than was expected. Tansō himself had a deep understanding of Western Learning. But we can not certificate by historical materials many of those who later became pupils of Western Learning. In this monograph I cleared up the relations between Kangien and such pupils as Kenkai Oka, Genpō Matsushita, Jun Yada, Yūshi Takeya, Hikoma Ueno and others. Kangien (the Hita City Library) we can find only several publications (including no Western book) pertaining to the Western Learning. But the Senken-bunko (先賢文庫 Library of Old Wise Men) has considerably numerous manuscripts pertaining to the foreign relations and the Western Learning. Some of these manuscripts have the seal of Kyokusō Chinzō (旭荘珍蔵 Precious Manuscripts collected by Kyokusō). Kyokusō is the youngest brother of Tansō. He led Kangien for a time after Tansō. These manuscripts were collected by Kyokuso's painstaking. The Senken-bunko mostly consists of the translations of world geography and occidental history, and manuscripts relative

to the coast defense, military preparations, England and U.S.A. These collections themselves indicate the intimate relations with the tendency of thought of Tansō and Kyokusō. As the manuscripts relative to pupils I found only "Ryōjiroku" (療治錄 A Record of Medical Treatment) of Kensuke Oka and "Suifu-hyōryū-ki" (水夫漂流記 A Record of Drifting of Sailor) and so I introduced them. But Kyokusō's voluminous diary ("Nikkan-saji-bibōroku 日間瑣事備忘錄 Memoirs of Daily Trifles) and immense letters relative to Tansō and Kyokusō are not yet, completely investigated.

If these materials are minutely studied, it will be possible to probe more deeply into this problem.